わが国建築教育の特殊性と今後の展望

On the peculiarity of architectural education in Japan
and a prospect in future

水 野 信太郎*

Shintaro MIZUNO

はじめに

工業教育の中にあつて建築教育は少なからぬ特殊性をもつ。それは建築教育（建築家養成）が工学的な教育のみでは不十分で、建築の意匠面の教育もおろそかにできない理由からである。前者からは engineer architect が養成され、後者からは designer architect が生み出される。本稿はこのような事情に鑑み、全国の各建築教育機関（ここで言う建築教育機関の中には当初から大学や高等工業学校などのように建築の高等教育機関としてスタートするものもあるし、あるいは最初は初等・中等建築教育として開始される学校もあるが少なくとも今日大学として建築教育を続けている教室は考察の対象から落とさないように努めた）創設期の教授陣の専門分野を構造系と計画系に整理・検討し、それらが今日の建築教育にいかなる影響を及ぼしているのかを明らかにするための基礎的資料としたい。あわせて現在の建築界が抱える諸問題と今後の展望を考察する。

建築学の構造系と計画系

建築の専門分野を構造系と計画系に大別するとし、その両者に含まれる細かな専門領域を列記・解説すると以下ようになる。

建築の構造学は元来「建物を丈夫につくるための工夫」から出発しており、「構造的に云々」という

表現をする場合などには多分に安全性を意識している。このように構造系は建築を物理的な面から保証しようとする分野で、更に建物を具体化・実現するための仕上材料、施工方法などまで含まれる。今日では通常、建築材料、建築生産、施工、一般構造、建築構造力学などが構造系とされている。

一方、建築の計画学は「建築空間・住空間の企画から始まって、その空間の質を高める」ことを目途として芽生える。〔空間の質の要素〕としては空間の形態、プロポーション、（空間の表面、すなわち床・壁・天井など空間を仕切る材の）テクスチャー、光（色調を含む）、音、熱、湿気……ほかが挙げられる。これらの質・快適性をより高めようとするための計画系には環境計画、設備工学、建築設計、都市および農村集落の計画、建築史学・意匠……などがある。

わが国建築教育の特殊性

1868年の明治維新は、列強による植民地化から後発国・青年国家日本をいかにまもるかという大命題を目前に突きつけられ、その解決策を模索した結果の歴史的イベントである。そのような国際的情勢の中では、産業技術と軍事力の両面から国力を蓄えることが急務であった。この事情は工業教育の在り方そのものにも大きな影響を与えることになる。なぜならば明治政府の二大政策であった殖産興業と富国強兵は、根本において工業教育の充実に待つべきものであったからに他ならない。

建築教育も我が国では国家の体裁を整えるための実践本位の技術を教授する目的で開始された。建築学の旧称、造家 architecture が造船 naval archi-

* 東京大学生産技術研究所研究生
The Institute of Industrial Science University of Tokyo
昭和62年度工業教育研究講演会（1987-11-13）において発表

ecture と発想を一にする訳語であることから、
 どれほど軍需面 military engineering の色彩が強
 かったかが窺い知れる。また江戸幕府が西洋先進諸国
 と結んでしまった不平等条約を対等条約に改めるた
 めには、日本にも文化的な都市や西洋館が建設され
 ていることを欧米人に示す必要があった。このよう
 に近代日本の建築家には軍事面と社会面の双方から
 国家の体裁を整えるための、きわめて即物的な任務
 がかけられていたのである。

ところが西洋流の建築家 architect 的思想では「
 建築は必ずしも科学ではない。なぜならば科学は進
 歩するが、建築には進歩という軸的な尺度は時と
 してあてはまらない。ギリシア・ローマの古典と中
 世のゴシックあるいは近代のルネサンスのうち、い
 ずれが最も優れているかという議論は成り立たない」
 というように建築を文化ないし芸術品として見る考
 え方がある。建築に高度な精神性を求めるヨーロッ
 パ流の考え方と明治初年日本の建築に対するそれ
 には大きな隔たりがあった。

わが国では更に建築学に工学的な傾向を求める要

因が生ずる。ひとつは地震であり、いま一点は火災
 であった。地震はヨーロッパの殆どの国で考慮しな
 くて済むし、火災を恐れるのも木造家屋が建ち並ぶ
 日本に特有な問題である。このように計画系（意匠）
 だけでなく構造系（工学）のトレーニングをも一人
 の建築学徒に与える点が、わが国建築教育の特殊性
 である。

わが国建築教育の今後の展望

筆者は、わが国の建築教育が主に工業教育の一環
 として行われていることに明るい展望を見出し
 ている。今日建築を取り巻く環境は大きく変化して
 いるが、将来建築家 designer architect の職能が仮
 に狭められることがあっても、最後まで建築空間の
 質を決定する（特に仕上材料の選択による）分野だ
 けは建築家の手に残される。このような状況の中で
 多様な素材をより身近に学び、様々な材質感を学徒
 自ら獲得する好機が、わが国の工学部における建築
 教育に秘められていると考える。

日本建築教育史概観